

高等教育研究センター かわらばん

夏号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第15号

海外客員教授が薦める

博士論文を指導する秘訣十箇条

博士論文の指導法と聞くと、門外不出の印象がありますね。今回は敢えてその秘訣を、オーストラリアのウェスタンシドニー大学准教授でもあるクリスティン・ハルスさん(高等教育研究センター客員教授)に、教えていただきます。

博士号といえは国際的にも通用する最高級の「資格」です。しかし実際のところは、絶えず批判にさらされてきました。博士課程の学生は自分の学位を「中世から続く拷問の一種」と自嘲気味に語り、ときには「まともな人間なら取得しない」とさえ言い放ちます。米英豪で行われた調

査からは、博士課程に在籍している学生の満足度は低く、半数以上の学生がドロップアウトし、また、課程修了までの年数も増加していることがわかっていきます。さらに、日本の国立大学は、その法人化により、博士課程プログラムの成果と質の保証を通じて、国内外にその立場と信頼を誇示する必要に迫られることになりました。

昨今の博士課程は、専門職大学院ができたたり、博士課程プログラムの内容が多様化・高度化したりと、進化を遂げています。しかし博士課程の中心は今もって論文作成のための研究指導にあり、その論文指導の質

と指導教員にこそ学生の批判が集まっています。それでは「よい」論文指導とはどのようなものでしょうか？ 新米教員にもベテラン教員にも役立つであろう「博士論文を指導する秘訣十箇条」を以下に挙げてみることにしましょう。

一、問題が発生する前に気づくよう

まず、学生の能力と弱点、彼らが最も助けを必要としている点を知ること、時間を費やしてみましよう。指導教員は学生の能力を誤解していることがあります。

早めに気づくべき誤解には次のようなものがあります。
・学生は期限内に自分の能力で達成可能な研究課題を設定しているか？
・学生は自分の研究分野に関する優れた参考文献を手に入れているか？
・学生は主要な学術誌を知っているか？
・学生は必要とされる学問上の方法論を身につけているか？
・学生は必要な専門用語を習得しているか？
・学生は電子データを活用したり、パソコンで論文を作成したりするのに必要な技術を身につけているか？
・学生は明確かつ簡潔な文章を書くことができるか？

二、論文作成に取り掛かる前に、教員が学生に何を求めているのか、また学生が何を教員に求めるべきなのか、明確なガイドラインを提示しましょう。学生のなかには、指導教員は何時でも自分を手伝ってくれて、校正や編集をしてくれるのだと思っている人もいます。何が公正で理にかなっているのか、合意が必要です。

三、学生の進捗状況がわかるよう
なチェックポイントを設けましょう。計画は状況に応じて変更することもありますが、まずは以下の締め切りを提示しましょう。

- ・他の履修授業の完了
- ・公式の研究計画書の提出

授業にITを活用してみよう

『ティップス先生からの7つの提案』 〈IT活用授業編〉

メールやインターネットなどのITを授業に活用していますか？ 最近ではITを活用して優れた授業を実践している教員が増えてきました。しかし、ITのような新しい技術を単に授業に導入しただけで自動的に授業がよくなるわけではありません。それらの技術の特性をうまく活用してこそ、授業を大きく改善することができます。

次のような場面を考えてみましょう。朝あなたが新聞のテレビ欄を見て、担当する授業の内容に関連する番組を見つけたとしましょう。そのとき、あなたが授業でメーリングリストを作っていたら、その番組の視聴を即座にメールで学生に呼びかけることができます。メールは授業時間外において学生とコミュニケーションする手段となります。



このようなITを活用した授業のアイデアをまとめたものが、小冊子『ティップス先生からの7つの提案』です。IT活用授業編は、高等教育研究センターと情報メディア教育センターの教員が協力して開発したティップス先生からの7つの提案の4番目の冊子です。本子に興味がある学内の方にはお送りしますので、高等教育研究センターまでご連絡ください。(中井俊樹)

四、定期的な指導の時間を設定しましょう。どれだけ忙しくてもさぼらないようにしましょう。

五、早めに書くこと、そして、早めに書くことを学生に実行させましょう。私の場合、論文作成にとりかかっから2カ月目には学生に何がしか書かせています。これによって、学生は早い段階から自分の考えを概念化したり伝達したりする機会を持ち、博士論文の全容を概観できることになりました。

六、学生に惜しみなく情報を与えましょう。文献や学会案内の写しなどを学生に渡してあげましょう。あなたの知識を学生に授けることで、彼らからあなたの執筆中の論文へのフィードバックも

七、学会やジャーナルの論文を共同執筆し、学生に学術論文を書くことを促しましょう。

八、1週間ごとに、学生のドラフトを読んでフィードバックする時間をくりましょう。これはプロとして基本的な実践であるだけでなく、学生から感謝されることにもつながります。

九、学生を手助けすることを惜しまないと同時に、論文指導というのは学問的なものであって、セラピーではないという点も念頭に置きましょう。

十、論文を書くのは学生自身であり、学生にその責務があることを忘れないようにしましょう。論文指導の目標は、学生を自立した学習者にするにあるのです。(翻訳 齋藤芳子)

速報!

教育ワークショップを開催

7月25日、名古屋大学は新任教員研修の一環として「教育ワークショップ」を野依記念学術交流館にて実施しました。新任教員研修の対象者のうち66名が自主参加しました。ワークショップ①「今日の名大生の学習・生活実態を知ろう」(講師:近田政博)では、名大生の入学から卒業に至る特徴が説明され、今日の学生像について活発な意見交換が行われました。ワークショップ②「学生の参加度を高める教授法を学ぼう」(講師:中井俊樹)では、折り紙ゲームなどを通して効果的な教授法の基本について学びました。このワークショップは来年度以降も新任教員研修の中核として充実させていく予定です。

(近田政博)



Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

科目番号方式 (Course Numbering System)

北米の大学のシラバスや科目要覧などを手にしたとき、科目(授業)ごとに3ケタぐらいの番号や文字が付されていることに気づいた方は多いでしょう。「科目番号方式」は、それぞれの科目の提供母体(学科など)や専門の度合いを瞬時に識別できるように、数字や文字等のコードによって科目を体系的に管理するシステムです。

大学によってコードの様式は異なりますが、通常、2~4ケタの数字や、ときには数字と文字の組み合わせで表されます。たとえば、米国のサンフランシスコ州立大学では、以下のようなコード体系になっています。0~99 補習教育および単位を授与しない科目、100~299 1,2年生が履修すべき科目、300~699 3,4年生が履修すべき科目、700~899 大学院課程の科目、900~999 連合博士課程の科目、9000~9999 成人教育部門における専門職業科目。一般に、数字が大きくなるにつれて、より専門性(必ずしも難易度ではない)が高くなるものとみなされます。

科目番号方式は、単にカリキュラムの体系的観点から個々の科目を管理運営することに有効なだけでなく、学生が履修に適切な科目を判別し、学習する際にも大いに役立ちます。また、ある科目を履修するための前提要件として、それまでに合格しておかなければならない科目や推奨する関連科目などを特定し構造的に可視化することにも有効性を発揮します。

学士課程の「四年一貫教育」を謳う名古屋大学は、9つの学部と13の研究科(大学院)、多数の附属施設や研究所などで構成されており、多様な学問領域を擁していることは明らかです。大規模総合大学としての豊かな学術的資源を最大限に活かしたカリキュラムを体系的に学生提供するためにも、科目番号方式の導入は一考に値するといえましょう。(鳥居朋子)

授業紹介

全学教養科目「大学でどう学ぶか」

高等教育研究センターは本年度前期に、学生相談総合センターと共に全学教養科目「大学でどう学ぶか」を担当しました。この授業は、名古屋大学に入学したばかりの学生が、大学での勉学・学生生活についての基本的な知識を身につけること、それを通じてこれからの大学での4年間の生活について、ある程度明確な見通しと確信をもてるようにすることを目的としています。具体的には、大学での勉学の特徴を知り主体的に学ぶ必要を理解できること、名大の特徴や可能性について知ることをめざしています。

この授業は、昨年度までは2年生が対象でしたが、趣旨・内容を考慮して今年度からは1年生向けに開講しました。受講者も昨年度の約60名から約180名と大幅に増えました。

力や可能性に学生が気づくようにしています。第3単元(キャリア論)では、大学卒業後の生活を視野に入れた、これからの大学生活を主体的・創造的に送ることの大切さやそのためのノウハウについて説明しています。

授業は各5回の3単元で構成されています。第1単元(名大生論)では、名大入学の動機や今後の抱負について、先輩の報告なども参考にしながら、学生同士がホンネを出しあって議論しました。第2単元(名大論)では、平野総長から、ご自身の学生時代の経験を披露しつつ夢をもって大学生活を送ることの大切さについて熱く語っていただきました。さらに、学内の文系と理系の教員から、自らの研究内容を紹介していただき、学問のおもしろさとともに、名大の魅力

この授業の特徴は、学生の主体的な参加を促すため、双方向的な授業になるようにグループワークを多く取り入れていること、複数の課題(小テスト)によって単元の内容を振り返りつつ次の単元に進めるように工夫していることなどです。実験的な要素も多く、共同で担当する両センターの教員が、毎授業後にミーティングを開き、授業の工夫や改善に努めながら授業を進めました。(夏目達也)

科学の香る珈琲タイム



スポーツ・カフェ、ジブ・カフェなどテーマのあるカフェが流行りの昨今ですが、街角のカフェで珈琲片手に気軽に科学の話をしてほしいという科学喫茶をご存知でしょうか。科学喫茶(カフェ・シアンティファイック)や科学酒場(バー・デ・シアンス)は、もともと90年代後半にイギリスやフランスで始まり、日本でも昨年あたりから急速に広まっているものです。名大教員を中心とするグループ、カフェシアンティファイック名古屋(CSN)も本年度から科学喫茶や科学酒場を始め、本センターも運営に協力しています。先だって七月二二日(土)には、本学環境学研究所高野雅夫氏をゲストに千種のバー、カルヴァドスにて「持続可能な社会づくりのための科学—市民参加型科学がはじまっている—」と題した科学酒場を開催しました。今回は三省堂テルミナ店喫茶コーナーにて九月二日(土)午後三時から、本学理学研究科の福井康雄氏がゲストです。

本センターでは、高等教育と社会との架け橋となる取り組みを今後にも応援していきます。CSNの活動予定はWEB (url <http://www.info.human.nagoya-u.ac.jp/lab/phil/cafe/>) にご覧ください。(齋藤芳子)



4月22日(土)、三省堂テルミナ店喫茶コーナーでの科学喫茶。ファシリテーターは戸田山和久センター長が務めました。

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『科学者という仕事』

—独創性はどのように生まれるか—

酒井 邦嘉 著 中公新書 2006年

本書は、科学者・研究者という職業の特異性について、古今東西の大科学者の言葉を引用しながら縦横に論じた快著である。人類の名だたる研究成果の背景には、科学者の苦闘、嫉妬、劣等感、ホームシックといった泥臭い人間ドラマが存在していることを教えてくれる。それから、著者の概念整理の鮮やかさには瞠目させられる。そのメッセージはいたってシンプルである。研究者の目標とは「人のやらな

いことをやり、人の考えないことを考えること」、研究発表は「正しく、わかりやすく、短く」、大学教育の目的は「学生に考えさせること」など。

難しいことの本質をわかりやすい言葉で表現してくれるのが良書の条件であるとするならば、本書はまぎれもなく三重丸である。創造的であるために必要なことは、科学者のような「論理の世界」も、芸術家や作家などのような「ア

ートの世界」も、本質的には変わらない。基礎知識を模倣・修得し、自在に活用できるようになってはじめて、創造の舞台へと踏み出すことができる。その際に重要なことは、「鈍」であることだと言う。「鈍」とは、先があまり見えすぎず、頑固一徹で、周りに流されず、試行錯誤や無駄をいとわないという意味での「誉め言葉」として使われている。

本書は研究室への配属を控えた理系学生にぜひ読ませたい。あるいは文系学生のための理系教養にもなりうるし、あらゆる分野の大学院新入生にとってもオリエンテーション(方向づけ)の示唆を与えてくれるだろう。本書を読めば、真の教養に文系・理系の垣根は存在しないことがわかるだろう。(近田政博)

高等教育研究センタースタッフ (2006年8月現在)

センター長 戸田山 和久
専門領域: 科学技術社会論
教授 夏目 達也
専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論
助教授 近田 政博
専門領域: 比較高等教育学、初年次教育
助教授 中井 俊樹
専門領域: 大学教授法、高等教育マネジメント

助教授 鳥居 朋子
専門領域: 高等教育カリキュラム論、教育経営学
助手 齋藤 芳子
専門領域: 科学技術と高等教育、科学技術社会論
専任職員 井上 和美
事務室連絡先: 052-789-5696

ホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

<平成18年度 外国人客員教授>
クリスティン・ハルス (2006年4月~2006年9月)
ウエスタン・シドニー大学准教授 (オーストラリア)
ジェラルド・フライ (2006年10月~2007年3月)
ミネソタ大学教育人間発達学部 (アメリカ合衆国)

<平成18年度 国内客員教授>
馬越 徹 桜美林大学 大学教育研究所 所長
小笠原 正明 東京農工大学 大学教育センター 教授
吉田 文 独立行政法人メディア教育開発センター 教授